

神学博士佐竹 明氏の『ヨハネの黙示録』

おり、一九世紀以来の研究史を批判的に整理しつつ、黙示録の文学的・思想的性格について総合的見地から整合的な展望を示した意欲的な作品である。

本書では、通常「注解」に際して期待される、使用される用語・概念・伝承素材（主として旧約聖書からの素材）の解明に力が注がれているが、とりわけ「黙示録」の著者（ヨハネ）自身がそれらを用いて何を言おうとしているかが明らかにされている。そのために「黙示録」全体およびそれを構成する各単元の構造の分析が重視され、また著者ヨハネが伝承素材にどのように手を加えたかが確認されている。これは、現代の多くの注解者も行っていることであるが、佐竹氏はそれを本書で一層徹底させ、ヨハネの著作意図を解明している。

このような個別単元の注解作業を積み重ねた結果、本書では「黙示録」の（１）著者の来歴について、（２）執筆の社会的背景について、（３）神学思想の特徴について、以下のような、それぞれ従来の現代二積佐竹枝うは威酌尔揚証据身資 背悟歌懸いるべ、⁺獮尔 聖猶

「[■]日 いる（[■]汁ひ恥長るかか去

糾疇璆 渚都⁺爰ア匡曝く解常[□]の傳椿

の概念の使用例を逐一検討することによって、次のことを明らかにしている。すなわち、キリストの「贖罪死」理解は著者にとって中心的意味をもっていない。彼にとつて救済とは何よりも信徒に対する外界のさまざまな圧力からの解放であつて、たとえばパウロにおけることき、人間の内奥の罪からの解放の問題は「黙示録」ではほとんど關心外である。キリストは自らの死によつて生への道を開き、そのことを信徒にも可能としたという意味で救済者とされており、このことに対応して、信徒が死に至るまでキリストに忠実であることが救済のために不可欠の前提とみなされている。

以上、日独両語による浩瀚な注解書に結実した、佐竹氏の「黙示録」に関する歴史的・批判的研究は、過去の研究遺産を引き継ぐものでありながらも、それを批判的に大きく超えており、比類なき学問性と斬新な問題提起のゆえに、本研究を日本学士院賞授賞に値するものと判定する次第である。